現場の婦人と（名口判明してある）外科医の對話

婦問「

婦、問『先生、負傷者はどんなんですか』

医答『打込みです』

婦問『そうですか中まで（内臓のこと）こたへてゐますか』

医答『少々こたへています』

婦人の雑談――『それぢゃ開腹でも入れられたのだ』

婦問『先生どうしたらよいでしやう

医答『病院（住友）にでも入れて手当をすればよい』

婦問『生命には別状ありませんか』

医答『それは大切な（大事な）処（内臓のことだろう）が傷んでゐるから別

段ける事は出来ない』

土井ヤク女の着衣には明かに蹴られた土足の跡があり。『下アバラ』は軽に『ハレ』

上がってゐた事は実証を以って明言するに足る（証人多数）

朝く山で時間の遅速に従ひ、被害者は秋田市に苦しみ出した。

病院に於ける毆醫師の態度と被害者の容態

病院に運ばれたヤク女は再び前醫師の手に依って診察された。

然るに数刻を出でざるに前医師は『もう君たちから連れて歸れ』と云ふた。

附添人北村久壽久君曰く『本人はこんなに苦しんでゐるのだから決してよく

なったと思はれない入院をさして貰れ』と頼んだ

医師曰く『入院さす事は出来ない何時他の患者が来るか知れないから絶對

に入院は許されない』と云ふ。

此医師の言葉に憤慨した附添人達は直ちに傳命を採鉱課にゐる矛

議団幹部今村氏等に傳ふ會社の余りの仕打と其豪慢さに皆怒り

『医師自ら死んでもよいと云ふ態度なら勝手にせよ』と傳令を發した

附添人北村君は瀕死の状態にあるヤク女の為めに自己の感情を抑えて再三、再

四、医師と交渉した結果遂に医師は『然らば明日まで入院せしめよう』と言ふ

側の人達は手を拍ふして見るに忍びず、えれと急速に入院せしめよの議なり

タンカを作りて住友東平病院（海抜二千五百尺）に運んだ

病院に於ける毆醫師の態度と被害者の容態

事に依る。[illegible]